

# 学園祭のいま



## MEMBER

**齋藤 勝**

法政大学学生センター長、文学部准教授

**山本 憲吾**

追手門学院大学学生支援部次長

**福田 淳子**昭和女子大学学生部次長(学園祭顧問)、  
人間社会学部准教授**新井 喜雄**

石巻専修大学事務部事務課課長補佐

**大谷 奈緒子**東洋大学社会学部教授、  
広報・情報委員会大学時報分科会委員

## ニューノーマル時代における 学園祭のあり方とは

**大谷** 新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、大学もこれまでとは異なる対応を迫られることになりました。秋の風物詩として定着している大学の学園祭も例外ではありません。従来は多くの学生や来場者がキャンパスに集い、大学を華やかに彩る一大イベントでしたが、2020年度は開催中止、あるいはオンラインでの開催を強いられる大学が各地で相次ぎました。

コロナ禍2年目となる2021年度においては、一部制限を設けた上で対面開催を実現した大学や、オンラインとなっても開催にこだわった大学、あるいは対面とオンラインを組み合わせてハイブリッド開催した大学など、感染拡大防止に十分努めつつ、キャンパスのにぎわいを取り戻せるよう、開催に至るまでの間に各大学で様々な模索を続けられたことと思います。

本日は、今年度、それぞれ異なる形式で学園祭を開催した大学の方々にお集まりいただきました。この場では、準備から開催までに工夫を凝らした点や、2022年度

以降の開催において改善を要する点などを共有いただくとともに、ニューノーマル時代における「学園祭」とは各大学にとって一体どのような位置付けとなるのか、今後の展望を踏まえてご議論いただきたく思います。初めに、自己紹介とともに、各大学の学園祭の開催方式についてお話しさせていただきたいと思えます。では、法政大学の齋藤勝先生、よろしくお願いいたします。

## 2年連続して対面での開催を

**齋藤** 私は2015年度から市ヶ谷学生センター長、2017年度から全学の学生センター長を務めておりますが、学園祭については2011年度の副学生センター長の頃からほぼずっと携わってきました。法政大学には、市ヶ谷キャンパス、多摩キャンパス、小金井キャンパスの3つのキャンパスがありますが、今回は、自分が直接運営に関わり、また最も規模の大きい市ヶ谷キャンパスの「自主法政祭」を中心にお話しさせていただければと思います。

市ヶ谷キャンパスでは、2020年度は本学学生については入場人数の制限無し、学生の家族、サークルのOB・

OG、近隣住民の方々、入学を検討している受験生については、合わせて1日千人に入場を制限して対面形式で学園祭を開催しました。2021年度も対面開催で、本学学生とその家族については人数の制限無し、それ以外については1日千人を上限に入場を許可する方針をとりました。昨年度との大きな違いは、サークルの公演などで他大学の学生の参加を認めたとという点です。今年度も基本的に他大学の学生の入場自体は認めていませんが、公演のメンバーとして不可欠であるなどの理由があれば、サークルの活動に参加できるようにしたのです。また、今年度は屋台での調理も認めました。その結果、昨年度と比較するとよりオープンな雰囲気になったと感じています。

また、感染症対策として、2020年度は本学の学生も学外来場者も事前申込制とし、2021年度は学外来場者のみ事前申込制としました。さらに全ての来場者に健康チェックシートの提出を義務づけ、学生に対しては、家族の同意を得ること、学園祭の前後2週間は決して会食をしないことを参加の条件としました。結果的に、学園祭において感染者の発生がなかったことか







齋藤 勝氏

ら、学生も高い意識を持って感染予防に取り組んでくれたのだと実感しています。

**大谷** 来場者の反応はいかがでしたか。

**齋藤** 通常時よりは大幅に少ないのですが、本学の学生も含めて、2020年度は4日間で6千5百人、2021年度は1万4千人の来場者がありました。昨年度は学生同士が久しぶりに会えたことをとても喜んでいたのが

印象的でした。普通に話せただけで楽しかったと言ってくれて、何だか泣けてきました。本当に開催してよかったですと思いました。

今年度、特に印象的だったのは、ご家族の方が多かったことです。また、例年以上にサークルの展示企画を熱心に見てくれる来場者が多かったですね。全体的にとってもアットホームな雰囲気でした。

## オンライン開催から

## 来場者を限定したハイブリッド開催へ

**山本** 私は学生支援部次長として、「OIDAI FESTIVAL」を含めた学生の課外活動のサポートを行っております。追手門学院大学では、2018年から「学友会追風」という新たな組織を立ち上げました。全学生が会員であり、「学部クラス連合」、「クラブサークル連合」、「合同学園祭実行委員」、そして教職員で構成されています。学園祭の開催にあたっては、学園祭実行委員会と学生支援部が綿密にやりとりをしながら詳細を決定していく仕組みになっています。

本学はコロナ禍以前の2019年4月に茨木総持寺キャンパスを新設しました。住宅地に近く、文教地域の創造を目指した都市計画の一環に位置付けられたキャンパスであったことから、地域との繋がりを深めるべく、2019年は大々的に学園祭を開催しました。2日間で1万2千人が来場し、手応えを感じていたところでコロナ禍となってしまったため、突然、大きな転換を迫られることになったのです。

結果的に、2020年度は完全オンライン開催という形をとりましたが、2021年度は感染拡大防止の観点から一部の本学学生のみ来場可能とし、学外に対してはライブ配信やオンデマンド配信を行うハイブリッド開催としました。様々な制約はありましたが、実行委員の学生たちは昨年度のオンライン開催の経験を踏まえて新しい企画を考え出すなど、順応力の高さを見せてくれました。また、昨年度はほとんどできなかった地域との交流を意識した動画コンテンツを配信したことも今年度の特色です。

**福田** 私は学生部次長として、昭和女子大学の「秋桜祭」の顧問を務めました。2020年度はオンラインのみ

での開催でしたが、2021年度はほぼ対面に近い形のハイブリッド開催としました。通常は2日間で2万人以上の来場者がありますが、今年度は学外者については事前申込制とし、1日の来場者数の上限を通常約1万人の3分の1である3千人程度に設定しました。本学学生の入場は自由です。また、本学は同じキャンパス内にテンプル大学ジャパンキャンパスとブリティッシュ・スクール・



福田 淳子氏



イン・トウキョウ昭和がありますので、そちらの学生にも参加してもらい、国際色豊かな学園祭となりました。

秋桜祭への参加団体は約50にのぼり、ゼミやプロジェクトの研究成果、クラブ・サークルのパフォーマンスをキャンパス内で発表すると同時にオンライン配信を実施しました。俳優を招いてのトークショーは事前収録したものを毎日配信する形をとりましたが、恒例のお笑いライブは学生300人限定で観覧を許可し、生配信も行いました。感染対策を行いながら、できるだけ通常に近い形を模索した結果、企画によって様々な参加形態を取りました。

一方、来場者と接触する可能性がある発表や模擬店などは全面的に不可としました。また、飲食可能なスペースも2カ所に絞るなど、極力、密を避ける環境作りを心がけました。

## 学生同士の交流や

## 地域との交流を重視

**新井** 私は事務課の学生支援担当として、「石鳳祭」せきほうさいのお手伝いをしてきました。石巻専修大学は地方の小規



新井 喜雄氏

模な大学であるため、来場者数は多くありませんが、その分、地域に根差したイベントにすることを意識しています。また、東日本大震災の被災地ということもあり、被災者の方々に楽しんでもらうことも大切にしています。しかしながら、2019年度に台風19号が宮城県に直撃した影響で学園祭が中止になり、2020年度と2021年度はコロナ禍によりオンライン開催となった

ため、3年連続で通常の学園祭が開催できない状況になっていきます。

昨年度の授業は原則非対面となっていたため大学側は中止の方向で考えていましたが、実行委員会の学生の強い思いを汲んで、ZoomとYouTubeによる完全オンラインでの開催を決定しました。非対面授業が続き、友人ができないという新入生が多かったことから、Zoomを使った交流イベントなども行われました。今年度は対面授業に戻ったことから実行委員会からも通常どおり、対面での開催をしたいという要望がありました。したが、準備を進めていく中で再び感染が拡大したため、結果的にオンライン主体で一部対面形式にて開催しました。対面で行ったのは、芸能人のトークイベントで、本学の学生に限り抽選で人数制限の上、観覧可能とし、YouTubeで同時配信を行いました。

## 学園祭を通して 伝えたかったメッセージ

大谷 それぞれ、感染拡大の状況、大学の状況を注視

しながら、試行錯誤された上で開催にこぎつけたことがよくわかりました。開催の有無、あるいは開催形式を決定するまでには紆余曲折があったかと思えます。大学としてその判断を下した背景と、そこにどのような想いが込められていたのかを教えてくださいませんか。

**齋藤** 本学では昨年度に対面形式で開催し、問題なく実施できていたため、今年度も当初から対面形式での開催が前提になっていましたので、ここでは昨年度の流れをお話ししたいと思います。

学生のみなさんと開催するか否かの話し合いを最初に行ったのは、2020年5月頃のことでした。開催を躊躇している学生もいましたが、その時点で開催の有無を決めないという選択をしました。なぜなら、新型コロナウイルス感染症がどのようなものなのかまだわかっておらず、半年先の状況がどうなっているのか、この段階では判断できなかったからです。もしかしたら開催できるようなになるかもしれないのだから、決定はギリギリまで待ち、それまで準備だけは進めよう。仮に中止になったとしても準備をした経験を次の年に生かせるはずだ。そう話したところ学生のみなさんは納得してくれました。



実際に開催を決定したのは、開催日の3週間ほど前の10月半ばでした。その頃は感染状況がだいぶ落ち着いており、大学からもゴーサインが出たのです。当時の総長であった田中優子先生と、当時の理事で現総長である廣瀬克哉先生のご理解があったことも大きいと思っています。お一人とも課外活動は学生が成長するために必要なものであり、課外で醸成された人間関係は学生が正課に取り組むうえでも重要な役割を果たしているという考えをお持ちでした。

私としては学園祭を開催することで、学生に向けてメッセージを伝えたいという想いがありました。当時、感染を心配して家に引きこもってしまう学生や、学生生活を満喫できず精神的に落ち込んでしまっている学生が多くいました。しかし、感染症についてしっかり学び、感染対策をしつかりすれば、大学にも来られるし、学生生活を楽しむこともできるし、友人も作れる。そのことを、学園祭を通して伝えたいのです。実際、学園祭に参加した学生同士で交流も生まれ、楽しかったという感想も多く聞かえてきました。それで前向きになれる学生がいたのなら、開催したことに大きな意義があったの



ではないかと思っています。

**山本** 本学では、昨年度はオンライン開催という選択肢しかありませんでした。本年度も基本的にはオンラインになるであろうという前提で、学生も準備を進めていました。感染リスクを考慮して、ほぼオンラインのハイブリッド開催にすることを決めたのは、開催予定日の3カほど前のギリギリのタイミングです。学生は集客に不安を感じていましたが、失敗してもいいからできる範囲で最大限の努力をしてみようという話をして、前向きに準備に取り組んでもらいました。

## 学園祭の準備の過程で垣間見えた 学生の成長と変化

**福田** 私は今年度から学園祭の顧問になったため昨年度の流れは把握できていませんが、見る側としては、オンライン開催ではやはり面白さが伝わりにくい企画も多かったように感じました。そこで、秋桜祭実行委員長、学生部長、学生支援課長らと交えてミーティングを重ねました。話を聞くと学生側も昨年度は初めてのオ



ンライン開催ということもあり、準備不足で悔いが残っているようでした。そのため、充実したものにするために、対面開催かオンライン開催か早めにどちらかに決定して準備を進めたいという希望を持っていました。しかし、本学にとって学園祭は高校生を始め多くの方に本学をご覧いただける貴重な機会ですので、対面開催の可能性も残しておきたい気持ちもありました。実行委員会と話し合いを重ねた結果、5月にハイブリッド開催の決定をしましたが、対面かオンラインかの判断日を9月と10月の二段階に設け、慎重を期して臨みました。

対面・ライブ配信・オンデマンド配信を組み合わせたハイブリッドで開催するにあたり、配信に詳しくない学生も多かったため、教職員がカメラや機器の操作を教えるなどのサポートを行い、担当の学生たちは配信の練習を何度も繰り返し返しました。その結果、開催内容は昨年度にも増して充実したものになり、学生からもやって良かったと満足の声をもらっています。

感染対策に関しては、学生もよく理解しており、自分たちでガイドラインを作成して、それに則って対策を講じていました。他にも、開場前に全員が体調をチェックシ―

トに記入して提出するといったことも自主的に行うなど、様々なところで成長を垣間見ることができました。

## 対面とオンライン

### 感染状況に応じた選択に備える

**新井** 一昨年度は台風19号の影響で学園祭が中止になったため、できれば2年連続で中止という事態は避けたいという思いがありました。感染リスクを考慮した結果、昨年度は学生限定の完全オンライン開催となりましたが、学生たちはオンライン授業でZoomの使い方に慣れていたため、思った以上にスムーズに開催することができました。

今年度は対面授業が再開されていたこともあり、対面開催を前提に準備を進めていましたが、状況が変わることも想定してオンラインの企画も用意するように学生には伝えていました。実際、開催日が近づいてくると感染状況が悪化してしまい、オンライン開催を余儀なくされましたが、不測の事態に備えていたため大きな混乱はありませんでした。しかし、芸能人を招いたイベントは



対面で実施したいという学生からの強い希望があったため、それを実現するためには労力を費やしました。ちょうど、東京で感染が急拡大していた時期でしたので、東京から人を招くことに大学としても抵抗がありました。が、芸能事務所と大学の双方が感染対策を確認し合い、万全の体制でイベントを実施することにしました。

懸念しているのは、3年連続で対面開催ができなかったことで、学園祭のノウハウがうまく学生に継承されないのではないかということです。特に1、2年生は実行委員会に参加した人数も少ないため、どのようにしてノウハウを伝えていくかが来年度の大きな課題だと考えています。

## 対面開催実現に向けて ルールを守り、責任感を持つ

**大谷** 新井さんのおっしゃったような課題は、各大学で浮かび上がってきていることと思います。これまでのご経験から、コロナ禍における学園祭で見えてきた課題や改善すべき点、あるいはこれからの展望などがあります。改善すべき点、あるいはこれからの展望などがあります。たら、今後のためにお聞かせいただければと思います。

**齋藤** ここ2回の学園祭で一番難しいと感じたのは、

みんなの気持ちをひとつにすることでした。どんなにルールを作ってもそれを破ってしまったら無意味です。せつかくみんなで頑張って対面開催を実現しても、そこで誰かが飲み会を始めたり、マスクをしないで騒いだりしたら終わりです。だから本当に全員がルールを守ることが大事なんだと実行委員会の学生には力説しました。多くの大学が学園祭を中止したり、オンライン開催に切り替えていく中、本学が対面開催をすることに責任を持たなくてはならないと。本学が開催に成功すれば、来年は他の大学もできるようになるはずだから、自分たちが頑張るしかないんだと。実行委員長からも参加団体に対して、熱くそういった話をしてくれました。そのおかげで学生のみなさんにも責任感が生まれ、一体感が出てきたように思います。

見えてきた課題は、現状のルールだとしても参加できないサークルがあるということです。例えば声優のトークショーのようなイベントは、もともと学内よりも、学外からの集客を多く見込んでいるため、学外者の入場を制限すると成立しなくなります。また、逆に大規模



山本 憲吾氏

なダンスサークルなどは一番大きなホールにも入りきらないくらい集客があるため、密を避けるルールが守れなくなってしまう。そういう理由から2年連続で参加を断念したサークルもいくつかあります。今後はそうしたサークルも参加できるような仕組みを作っていくことが必要になると考えています。

一方で、目を見張るような学生独自の創意工夫もあり

ました。市ヶ谷キャンパスと多摩キャンパスでは既存の入構管理システムを導入していたのですが、小金井キャンパスは理系キャンパスということもあり、学生がオリジナルの入構管理システムを構築しました。それが、法政大学憲章を体現した学生・教職員等の取り組みを顕彰する「自由を生き抜く実践知大賞」の大賞に選ばれました。学生の中にそうしたモチベーションが生まれるのは非常に大切なことだと思います。

## オンライン開催で得た知見を 今後にも生かしたい

**山本** 2022年度の学園祭は、ぜひ対面で開催したいというのが、まず率直な気持ちです。ただ、オンラインという制約の中で様々な試行錯誤をしたことで、コンテンツのレベルがかなり向上したことも実感しています。例えば、学園祭の開催1週間前からイベントや展示に関連するコンテンツを公式Webサイトで観られたり、オンデマンドで公開していたコンテンツの表彰式をライブ配信したりするなど、従来の学園祭にはなかったオンライン

ならではの取り組みも見られました。また、広報に関しても以前は近くのお店を回ってポスターの掲示をお願いしていました。今はターゲットを絞ってSNSで広告を打ったりしています。来年度以降、対面開催ができるようになったとしても、そうした知見をうまく生かして欲しいと思います。

懸念するのは、やはり対面開催に比べると、オンライン開催では手応えを感じにくいという点です。齋藤先生がおっしゃっていたような学生や家族の方が喜ぶ顔を直接見られないとどうしても達成感を得づらいのです。オンライン開催で手応えを得る方法を模索すべきなのか、あるいは対面開催でしかできないことと割り切るべきか、これから考えていかなければならないでしょう。

もしかしたら従来型の学園祭は固定観念でしかなく、今後どんどん新しい形に進化していくのかもしれないと思う一方、完全に違う形になってしまうことに対する不安も感じています。いずれにしろ、学園祭は学生にとって大切な課外活動です。彼らがそこで何を体験して、どう学んでいくかということを一番重視して、学園祭の理想的なあり方を考えていきたいと思っています。

## 制約の中から生まれた 新たな可能性

**福田** 今年度は、毎年好評の環境デザイン学科によるファッションショーを無事開催することができました。通常ですと、体育館や大教室のランウェイをモデルが練り歩くのですが、今年度は屋外ステージを設置しなかった



大谷 奈緒子氏





ため、その場所に例年にはなかった空間ができました。その空間を生かしてショーを行ったのですが、モデルたちが木々の緑の中を音楽に合わせて颯爽と練り歩くという今までにない新鮮な演出ができました。また、いつもは模擬店でにぎわう学生ホールも今年は出店を許可しなかったため、ゼミやプロジェクトの展示会場として活用しました。すると、まるで美術館のような落ち着いた雰囲気のある特別な空間ができあがったのです。このように、従来の慣例にとらわれない空間の利用の仕方を発見できたことは大きな収穫だと思っています。

準備を開始した当初、学生たちは少し消極的に見えました。準備を重ねるに従ってだんだん元気になり、学園祭のテーマも「Breaking Through」、殻を打ち破る、切り開くという前向きなものになりました。様々な制約がある中での開催でしたが、まさに自分たちの殻を打ち破り、新たな可能性を見つけてくれたのではないかと思っています。来年度以降も学生たちの可能性を引き出せるようにサポートしていきたいですね。

**新井** 先ほど申しましたように、学園祭のノウハウの継承が本学では大きな課題となっています。通常の大学祭



のノウハウを知っている学生は、今年度で卒業してしまうのですが、本学はOB・OGとの繋がりが緊密ですので、何らかの形で協力いただけると期待しています。その一方で、テントの張り方やロープの結び方など基本的なところを知らない学生も多いため、我々のような事務方が率先して教えていかなければならないと考えています。来年度こそはどうか対面開催を実現し、大学はこんな楽しいことができる場所なのだと思いのみなさんに伝えたいですね。

**大谷** 各大学が創意工夫をこらし、学生の気持ちも汲み取りながら、コロナ禍に対応した学園祭の実現に尽力されていることがよくわかりました。コロナ禍の先行きはまだまだ見通せませんが、皆様のお話を伺っていると、どんな形式であれ、2022年度はより良い学園祭が開催できるに違いないと確信できました。私自身も学生の大学生活をより充実したものにするために、少しでも力になればと思っています。本日は誠にありがとうございました。